

「MOKU」2014年3月号

身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ

崖っぷちを超える

知識と知恵は違う。知識は一人で外から得るもの。知恵は「相手」のために自分で生み出していくもの。その知恵を相手に対してどう使うか試行錯誤するのが工夫。大型冷蔵庫みたいに知識をどんどん頭に詰め込んでも、工夫は生まれへん。詰め込みすぎても腐らせるだけ。知恵は腐らへんどころか、泉のようにどんどん自分の中に湧いてくる。なぜなら、知恵は見えざる本能と直結してるからや。

小学校に慣れる間もない一年生のときだけで転校三回。その後も数えきれんくらいあっちこっち父親に連れ回された。学校から帰った途端、「ランドセル持てや」。行き先も分からず出ていく。着替えも、ブリキの飛行機も、持つ時間はない。教科書なんか転校先で変わるから、真っ先に置いていく。新しいところに行ったら行ったで、自分で新聞配達しながら稼いだり、どうやったらけんかで負けんようにできるか、生き抜くことを考えるのは同じこと。「きょう、食いつぱぐれないようにするためには、どうするか」が重大事項。

そんな生活やったから、当然、知識なんかよりも知恵が身に付いてくる。素早く食う。あるときに食う。盗んで食う。いい知恵も、悪い知恵も、「生きるために必要な知恵」という意味では同じやったし、片方だけでは生きていかれへんと思ひ知った。知恵こそが生きるツールなんやと身に染みた。

知恵のない人の多くは、「自分にはあれがない、これがない」と「ないもの」を見ようとする。学歴がない、知識がない、ネットワークがない……。そうじゃなくて、「あるもの」を見ればええねん。肉体がある。命がある。もうそれだけで「強者」や。「弱者救済」とか、いい加減な言葉が蔓延しとるけど、生きてる人間に弱者なんかおるわけないやんか。生きてることがすごいことなのに、それ以上比較して強弱つけて、どないするねん。自分は生きてる。だったら命を使って何をするか？それしかない。

「いい知恵」も「悪い知恵」があるからそう呼ばれるだけ。相対的なものや。時代が変わったり、状況が変われば、善悪も変わる。「いい」も「悪い」も、そんな色分けなんかどうでもええねん。人間には「偽・悪・醜」が否が応でもあるんやから。「真・善・美」は「偽・悪・醜」があって初めて成り立つ。「善人」と言われる人だって、一人ポツンとおったところで、何の評価もない。周りに悪人がおるから善人が大事にされる。まして、自分は善人に「なろう」という考えなんかあったら、それこそ邪心でしかないから、悪人が善人にしてくれる、というくらいが正しい言い方とちがう？

でも、その知恵すらも及ばん出来事がたくさん発生する。人間は作為的な生き物やけど、自分では計算や予測のできないもののほうが実は多い。人生は、自分の予測外のところで

成り立つとると言ってもええ。

じゃあ、そういうときに何ができるか。目の前のことに集中する。それしかない。でも、そうやっている、いつの間にか自分の行動が、奪うことから与えることへと変化していく。

この十二年間がそうやった。計算も予測もなしに「たった一人を救う」に集中していたら、囚われがなくなった。過去を捨てることができた。象徴的に言えば「自分を殺す」ことができた。思い出にしがみつかなかなくて済む。昨日があったことすら思い出さなくていい。つまり「人生のアルバム」が要らないということ。

設立から十五カ月間、二十四時間相談の体制を続けていたけれど、体力が限界にきたとき、家賃の滞納ももう「これまで」になった。三カ月も続けばええやんと思って始めたから、まあよくやったんとちゃうかと思った。

だけど、諦めるつもりもなかった。家賃が三倍の事務所を借りた。金のあてなどまったくなし。「ここでやりたい」それだけ。もはや崖っぷちどころか、崖っぷちを超えたところに立った。

そうしたら、何と、寄付が集まって敷金が払えた。「これで三カ月はできるな」と再開。不思議なことに、それからは人が集まってくるようになった。メディアもそれまで以上に真剣に取り上げてくれるようになった。結果的にはお金も付いてきた。自分で「ああしよう、こうしよう」という作為など及ばない世界に自分で入った感じがした。

分かったことは、自分に嘘をつかないで生きようとすれば、捨てる人生を歩けるようになるということ。

## 「ある」から捨てる

苦勞にはいろんな種類がある。まず、欲から出た苦勞。これは自分から作ってしまうもの。人が良すぎることで生まれる苦勞もある。これは自分が分かってへんからやってしまうこと。そして、苦勞が身に付くものもある。人に担がれてする苦勞や。

ほとんどの苦勞は、お金とか、名誉とか、しがみつきたくなる欲が生み出す。だから捨てる人生が大事なんや。奪いながら何も得られへん人生と、捨てて与えながらオモロイ人生。どっちも経験してきて、捨てる意味がよく分かる。

「捨てる」ということは、「ある」ということが前提。それこそ「ゴミ箱」の論理。

最近、全国の街の中からゴミ箱をなくしてしまおうとしてる。ゴミ箱があるからゴミが増えて汚くなる、という理屈らしい。そんなことあるわけない。処理システムの問題や。自動販売機で飲み物を売れば、空き缶になるのは当たり前。空き缶入れの穴に突き込まれた状態で放置するから汚くなる。早め早めに回収すればええだけや。

生活すればゴミになってしまうものが初めから「ある」という現実は否定できない。ゴミ箱をなくしても、どこかにゴミは捨てられる。自転車のカゴが空き缶入れになってるの

は、みんな知ってる。人間はそういう生き物。これが前提。

清掃の仕事をしていたとき、ゴミのない道路の下、マンホールに潜ってみると、吸殻やゴミがいっぱいだった。足元のその下には目が向かへんのや。でも、自分の家には必ずゴミ箱がある。俺の知り合いのホームレスかて、必ずゴミ箱は用意してる。みんな、ゴミがあると知って生きてる証拠や。

学校には、いじめが「ある」ねん。あることを前提として考えないと隠ぺいされて、もっとひどいことになる。隠ぺいの温床は「ない」という嘘をつくこと。政財界の得意な手法や。

原発も「トイレのないマンション」と言われるように、出るゴミが問題なのに、ゴミ箱がないねん。ゴミ箱すら作れんような原発を「再稼働」とか「新設」とか言うのは、原子力ムラが自分の利益を捨てられへんからや。だから隠ぺい体質、無責任体質になっていく。「捨てる」を覚えるべき、と言うのはそういうこと。

かつて、ニューヨークの市長が割れた窓ガラスを修理するところから治安を回復させたことがあった。治安の悪さが「ある」と前提にしたから昔のような状態から脱した。日本でも、飲酒運転は「ある」ということを前提として行政や車メーカーが対策を講じてきた結果、交通事故は以前の半数に減ったんやから。

ゴミも、いじめも、被害者も、加害者も、犯罪も、ある。「ある」からの発想が必要。人間の身体は動脈だけじゃ成り立たへん。静脈も必要。老廃物が「ある」から腎臓も必要。

「ある」という現実を考えないから、ゴミ処理も、原発の事故現場の作業も、安い賃金で誰かが必ずやっていることにも思いが至らん。見えへんことも人間がやってるんや。

ゴミ処理はできんのに、人間を放っておくことには痛みを感じへんのかなと不思議に思うことがある。

保育所に入れない待機児童が都市部にはたくさんおる。全国で五万人。少子化なのにもかかわらず、これだけおるといのは、これはもはや国の政策としては構造的な欠陥と言うしかない。

一方で、もっとすごいのが特養施設に入れない待機老人の数。四十二万人とも言われている。これも高齢社会の「ある」を前提としては考えられていない。いくら民間の力を借りて「デイケア」「お泊り」というかたちで補おうとしても、限界がある。事故が起きてもおかしくない状況の中でやっているところも少なくない。

いま日本に必要なのは「護美箱」や。自分が美しさを護る箱になろうという発想。人間のゴミ捨て場のような西成（西成区釜ヶ崎）で生まれて、何の因果かいまは歌舞伎町。金のない沈んだ心が捨てられるゴミ箱と、金のある者がむき出しの欲望を捨てたゴミ箱。どっちのゴミ箱にも、人間の裏の部分がしっかり捨てられてる。